

# ノートテイキング量と英語テスト得点との 関連について

野本 尚美・\*上村 英男

(2024年3月13日受理)

## The Relationship between the Amount of Note-taking and English Test Scores

NOMOTO Naomi・KAMIMURA Hideo

要旨：本研究では、非英語専攻の短期大学生38名を対象としてノートテイキング量と確認テスト（授業内容に関する学期末テスト）との関連について調査した。5回の授業のノートテイキング量について多量群・平均群・少量群の3つのグループに分けてテスト得点との関連を調べた結果、確認テストにおいてはグループ間の得点に差は見られなかった。このことから、ノートテイキングの量は必ずしもテスト得点に関連しない可能性が示唆された。

Key words：ノートテイキング テスト 英語教育

### 1. はじめに

ノートテイキングとは、学習者がノート・配布資料・テキストにメモをしたり下線を引いたりすることである<sup>1)</sup>。一般にノートテイキングは学習効果があるという前提に立って捉えられており<sup>2)</sup>、教師は授業中に学習者が熱心にノートを取っている姿を見ると良い授業ができているように感じ、学習効果が上がっていることを期待する。しかしその一方で、ノートやメモの取り方については学習者本人のやり方に委ねられていることが多く、ノートテイキング方略を獲得していないと感じられる学習者も散見される。これらのことを鑑みると、ノートテイキング方略を獲得していない学生がいるなかで、単にノートを取っている量が多いからといって必ずしも学習効果に結び付いていない可能性が考えられる。そこで本研究では、ノートテイキングの量と確認テストの点数との関連について調査した。

### 2. 先行研究

岸・塚田・野嶋 (2004) は、講義における情報をキー

センテンスごとに分類し、ノートテイキングされた項目とノートテイキングされた量について調べ、授業後と2週間後に課したテストの得点との関連について調査した。その結果、直後のテスト、2週間後のテストのどちらにおいても、ノートテイキング量とテスト得点の間に有意な正の相関があった。また、ノートテイキング量0群、少ない群、多い群に分けて分析したところ、授業後のテスト得点に有意差が認められたが、2週間後のテストではノートテイキング量とテスト得点の相関は維持されるものの、ノートテイキング量0群と少ない群では有意差が認められなかった。このことから、記憶の保持に関してはノートを少し取っていてもノートテイキングとテスト得点との関連は弱く、全くノートを取らない学習者と明確な差がないと述べている。一方、ノートテイキング0群・少ない群とノートテイキング量多い群との間には、期間をおいても有意差が認められたため、ノートテイキングによる記憶保持はノートテイキング量が多いときのみ認められる可能性がある<sup>3)</sup>と述べている。

\* 福岡工業大学短期大学部 情報メディア学科

浮谷(1990)は、授業におけるノートの取り方についての研究で、提出されたノートを①黒板の説明を写しただけ(板書のみ)、②板書と図を書く、③板書と言葉の説明を書く、④板書と図と言葉の説明を書く、という4条件に分けて集計した。授業後の試験の結果と提出されたノートの集計結果として、板書の場合に点数が取れにくいことを明らかにしている<sup>4)</sup>。

齋藤・源田(2007)は、ノートテイキングにおける方略の使用が学習内容の理解に与える効果について調査し、学習者のノートから学習内容の理解に有効であると考えられる6つの方略(箇条書き・文字の強調・図表・下線・囲み・矢印)を抽出した。また、確認テストの点数によって学習者を上位群と下位群に分類し、方略数やキーワード数を比較した。方略数について、学習者(大学生・高校生)とテスト(上位群・下位群)の2要因分散分析を行った結果、大学生は高校生に比べてノートテイキング方略を多く使用していること、また大学生と高校生の両方において上位群は下位群よりも方略を多く使用していることがわかった。キーワード数について同様の分析を行った結果、大学生と高校生ともに、上位群は下位群より重要なキーワードを多く記入していることが明らかとなった<sup>5)</sup>。

魚崎(2014)は短期大学生88名を対象として、授業中の配布資料及びノートへの書き込みを行った項目数と授業内容を再生した項目数の相関を調べた結果、有意な正の相関(多くの書き込みを行った学生が多くを再生すること)が認められ、書き込みを行った情報の方がより再生されやすいことがわかった。また、必ずしも書き込みの有無と再生とが対応していない項目も見られ、書き込みを行う上での処理の深さが関係している可能性も示唆している<sup>6)</sup>。

英語学習におけるノートテイキングについてもいくつかの研究が行われている。熊谷(2015)は、通訳学校における入門レベルの英語通訳クラスでのノートテイキング指導について考察している。熊谷によれば、ノートテイキングのトレーニングを受けた通訳は、話者の言葉を一字一句文字通りに訳すものではなく、「アクティヴ・リスニング」とも

呼ばれる能動的リスニングを行い、話し手の意図等を分析・整理して記憶しつつ、その記憶の補助として「通訳ノートテイキング」をし、話者の発言が終わり次第速やかに目標言語に訳出するものである。発言者が話す時間は長ければ5分以上になることもあり、全てを正確に記憶して自然に訳すことは不可能であるため、記憶の補助としてのノートテイキング・スキルが必要となる。具体的には「ノートを縦半分に分割して左上から縦にメモを取る」「全てを書き取るのではなくキーワードのみ」「文章の終わりや大きな意味の区切りをマークする」などの基本的なルールや枠組みを説明するが、新入生たちは略語や記号などの細部にのみ関心を持つ傾向があり、特に入門レベルの学習者は「単語／言葉／言語ではなくアイデアを書き留めること」が最も苦手であると述べられている。また、通訳のノートテイキングについて指導できる講師が少ない理由の一つとして、講師自身がノートテイキングについて明確な指導を受けてこなかったことを挙げている<sup>7)</sup>。

Crawford et al.(2015)は、ノートテイキングに関して日本人大学生739名を対象としたアンケート調査を行っている。「高校の授業でノートを取っていた」と回答した学生は、英語の授業については91.7%、英語以外の授業については92%であったが、「大学の授業でノートを取っている」と答えた割合は英語の授業で55.6%、英語以外の授業では78.5%であった。また、「高校の授業においてノートの取り方について指導を受けた」と回答した学生は英語の授業で55.6%、英語以外の授業で78.5%であったのに対し、「大学の授業でノートの取り方について指導を受けた」と回答した学生は英語の授業・英語以外の授業の両方で14%以下であった。「授業後にノートを見直す」と回答した学生は英語の授業で50%、英語以外の授業で51%であり、「ノートの再編集や要約をする」と答えた学生は英語の授業では26%、英語以外の授業では30%であった。大学では高校に比べてノートを積極的に取らない傾向があることと、大学でノートの見直しを行う学生は約半数であることが明らかとなった<sup>8)</sup>。

また、野本・上村(2023)は、教師が短期大学生

42名を対象として口頭で教科書への書き込みの指示を行い、実際に書き込みをした状況と、その7週間後に実施したテストの回答について調査した。その結果、教師が指示した2箇所の下線を書き込んだ学生は全体の約半数（それぞれ54.8%、61.9%）であり、教員が指示した日本語訳を書き込んだ学生は88.1%であった。一方で、教師の指示通りに日本語訳を書き込んだ学生のうち、約半数が期末テストで日本語訳を間違えて回答していることから、授業中の教師の指示を書き留めることだけでは不十分であり、事後の見直しや復習が重要であることを示唆している<sup>9)</sup>。

これらの先行研究から、ノートテイキングの量とテスト得点については明確な関連性があるとは言いきれず、また英語という教科についてノートテイキング量とテスト得点の関連性を調査した研究は極めて少ない。そこで本研究では英語の授業におけるノートテイキング量とテスト得点の関係について調査した。

### 3. 研究課題

本研究では、ノートテイキング量と確認テスト(授業内容に関する学期末テスト)の点数との関連を調べることを目的とする。

### 4. 研究協力者と調査手順

研究協力者は非英語専攻の女子短期大学生で、通年科目「英語会話」の受講者38名とした。使用テキストは『Happy English for Childcare 保育のための基礎英語』(土屋, 2015)<sup>10)</sup>である。テキストには問題だけでなく解答欄も設けられているため、ノートではなくテキストに直接解答や解説などを書きこむ学生が多い。そのため、テキストへの解答以外の書き込みの数をノートテイキング量とした。実際、本調査においては全員ノートではなくテキストに直接解答・解説を書き込んでいた。

2022年10月～11月に実施した5回の授業の中でテキストの問題について解答の提示や解説・発音練習などを行い、授業終了後に書き込みをしたテキストの写真を撮ってLMS上に提出させた。提出された写真から、解答以外に書かれているもの(「重要」

などの注意書き、下線、単語や熟語の意味、発音、文法的な説明など)をノートテイキングとみなし、各研究協力者のノートテイキング量をカウントした。なお、調査にあたっては、ノートテイキング量を調査していることを意識させないため、単に「何を書いているのか確認したい」とだけ伝えてノートに関するデータを収集した。2023年2月に学期末の確認テスト(授業内容に関するテスト)を実施した。確認テストに出題した問題のうち25%は今回調査対象とした5回分の授業で扱った問題である。

### 5. 結果

ノートテイキング総計(研究協力者38名が5回の授業で書き込みを行った総数)は872個であった。各研究協力者が5回の授業で書き込んだノートテイキング数の平均を算出し、下記の3群に分類した。

①ノートテイキング多量群12名(ノートテイキング平均数6.0～10.6)

②ノートテイキング平均群12名(ノートテイキング平均数3.0～5.9)

③ノートテイキング少量群14名(ノートテイキング平均数0～2.9)

確認テストにおける各群の平均点と標準偏差は表1の通りであった。

表1 各群の確認テスト平均点及び標準偏差

	確認テスト	
	平均点	標準偏差
ノートテイキング多量群 (n=12)	89.67	12.24
ノートテイキング平均群 (n=12)	94.00	9.30
ノートテイキング少量群 (n=14)	88.14	15.36

各群の確認テストの得点を対応なしの1元配置分散分析で比較した結果、有意な差はなかった( $F(2, 35) = .720, p = .494$ )。またノートテイキング量と確認テストの得点の相関係数は $r = .075$ となり、相関は見られなかった。

## 6. 考察と今後の課題

これまでのノートテイキングに関する研究においては、ノートテイキング量が多いほどテストで高得点を取る傾向があることが報告されていたが、本研究ではそのような傾向は確認できなかった。

確認テストについてグループ間での有意差が見られなかった原因として、確認テストの出題形式は教科書に掲載されている問題の形式とほぼ同じであり、授業中に教員の解説を細かく書き留めていなくても解答を暗記していれば解ける問題が多かったことが挙げられる。また、各群のサンプル数が少なかったこともグループ間に差が見られなかった要因の一つであると考えられる。

今回の調査ではノートテイキング量とテストの点数に相関は見られなかったものの、重要な箇所に下線を引くことや、教員が話したことについて要点をまとめておくことは、時間が経過したあとも学習した内容を学習者に思い出させ、記憶の定着を図るために重要な役割を果たす学習方略の一つであると考えられる。一方でノートテイキングをしない・できない理由については、すでに理解している内容だったため書かなかったという場合もあれば、話を聞いていなかった、内容を十分に理解できなかった、書くと思っていたのに板書されたものが消されてしまったなどの場合も考えられる。また、学習者の何らかの特性が関係している可能性も考えられ、ノートテイキング量が極めて少ない学習者に対しては今後も調査を進め、学習意欲が促進される環境づくりについて議論を重ねていく必要があると思われる。

英語教育においては、これまで授業中のノートテイキングについて取り上げられることはほとんどなく、学習者のノートの取り方については担当する教員それぞれの個人的な経験や考えに基づいて指示がなされている場合が多いと推察される。授業中に学習者がどのように話を聞き、何をノートに書いているのか、またどのようなノートの取り方が学習者にとって有益であるのかについて今後もさらに研究を進めたい。

## 参考文献

- 1) 小林敬一(2000)「共同作成の場におけるノートテイキング・ノート見直し」教育心理学研究 48(2), pp.154-164
- 2) 高橋均, 中井悠加, 吉岡真梨子, 野中陽一朗, 井上弥(2016)「大学生のノートテイキングはどのようになされているか? : 講義ノートの構造的特徴を手がかりとして」学習開発学研究9, pp.117-123
- 3) 岸俊行・塚田裕恵・野嶋栄一郎(2004)「ノートテイキングの有無と事後テストの得点との関連分析」日本教育工学会論文誌28(suppl), pp.265-268
- 4) 浮谷秀一(1990)「授業におけるノートの取り方の研究(I)」日本教育心理学会第32回総会発表論文集, p.385
- 5) 齋藤ひとみ, 源田雅裕(2007)「ノートテイキングにおける方略使用の効果に関する検討」日本教育工学会論文誌3(Suppl.), pp.197-200
- 6) 魚崎祐子(2014)「短期大学生のノートテイキングと講義内容の再生との関係: 教育心理学の一講義を対象として」日本教育工学会論文誌38(Suppl.), pp.137-140
- 7) 熊谷ユリヤ(2015)「入門レベルの英語通訳ノートテイキング指導」札幌大学総合論叢39, pp.1-16
- 8) Crawford, M., Ducker, N., MacGregor, L., Kojima, S., & Siegel, J. (2015) "Perspectives on note taking in EFL listening" JALT Postconference Publication, pp.277-84
- 9) 野本尚美, 上村英男(2023)「授業における学生のノートテイキングに関する一考察」仁愛女子短期大学紀要第55号, pp.13-17
- 10) 土屋麻衣子(2015)『Happy English for Childcare 保育のための基礎英語』金星堂